

悟淨出世

中島敦

青空文庫

寒^{かん}蟬^{せん}敗^{はい}柳^{りゅう}に鳴き大火西に向かいて流るる秋のはじめに
 なりければ心細くも三^{さん}蔵^{ぞう}は二人の弟子にいぎなわれ嶮^{けん}
 難^{なん}を凌^{しの}ぎ道を急^いぎたもうに、たちまち前面に一条の大河
 あり。大波湧^{わきかえ}返りて河の広さそのいくばくという限りを
 知らず。岸に上りて望み見るときかたわらに一つの石碑あ
 り。上に流^{りゅう}沙^さ河^がの三字を篆^{てんじ}字にて彫付け、表に四行の小
 楷^{かい}字^じあり。

はちひやくりゆうさのかい
 八百流沙界
 さんぜんじやくすいふかし
 三千弱水深

鷺毛がもうただよいかばず 飄よいかばず 不起おこらぬ
ろかそこによどみてしずむ
 蘆花あしはな 定底じやうてい 沈しずむ

——西遊記——

一

そのころ流沙河りゆうさがの河底がこに栖すんでおつた妖怪ばけものの総数すうずうおよそ
 万三千、なかで、渠かればかり心弱こころじやくきはなかつた。渠かれに言いわせると、
 自分おれは今いままでに九人くにんの僧侶そうりよを啖くつた罰ばちで、それら九人くにんの骸しやれこ
 顱うべが自分おれの頸くびの周圍まわりについて離はなれないのだそうだが、他の妖ばけも

怪らには誰にもそんなしやれこうべ骸顛おまえは見えなかつた。「見えない。それはおまえ儼おまえの気の迷いだ」と言うおまえと、渠かれは信じがたげな眼で、一同を見返し、さて、それから、なぜ自分はこうみんなと違ちがうんだらうといったふうな悲しげな表情に沈むのである。他の妖怪ばけものらは互いに言合あうた。「渠あいつは、僧侶そうりよどころか、ろくに人間さえ昨くつたことではないだろう。誰もそれを見た者がないのだから。鮒ふなやぎこを取とつて喰くつているのなら見たこともあるが」と。また彼らはかれ渠かれに綽名あだなして、独言どくげん悟浄ごじようと呼んだ。渠かれが常に、自己に不安を感じ、身を切刻む後悔さいなに苛さいなまれ、心の中で反芻はんすうされるその哀かなしい自己かじやく苛責かじやくが、つい独り言ひとごととなつて洩もれるがゆえである。遠方から見ると小さな泡あわが渠かれの口から出ているにすぎないようなとき

でも、実は彼が微かな声で呟いているのである。「俺はばかだ」とか、「どうして俺はこうなんだろう」とか、「もうだめだ。俺は」とか、ときとして「俺は墮天使だ」とか。

当時は、妖怪に限らず、あらゆる生きものはすべて何かの生まれかわりと信じられておった。悟浄がかつて天上界で霊者もない。それゆえすこぶる懐疑的な悟浄自身も、ついにはそれを信じておるふりをせねばならなんだ。が、実をいえば、すべての妖怪の中で渠一人はひそかに、生まれかわりの説に疑いをもつておった。天上界で五百年前に捲簾大将をしておった者が今の俺になったのだとして、さて、その昔の捲簾大将と今のこの俺と

が同じものだといっているのだろうか？ 第一、俺は昔の天上界の何を何一つ記憶してはおらぬ。その記憶以前の捲簾大将と俺と、どこが同じなのだ。身体からだが同じなのだろうか？ それとも魂が、だろうか？ ところで、いったい、魂とはなんだ？ こうした疑問を渠かれが洩もらすと、妖怪ばけものどもは「また、始まった」といつて嗤わらうのである。あるものは嘲ちやうろう弄するようには、あるものは憐れんびんんびんの面持ちをもつて「病氣なんだよ。悪い病氣のせいなんだよ」と言うた。

事実、渠かれは病氣だった。

いつのころから、また、何が因もとでこんな病氣になったか、悟ごじよ

浄はそのどちらをも知らぬ。ただ、気がついたらそのときはもう、このような厭わしいものが、周囲に重々しく立罩めておつた。渠は何をするのもいやになり、見るもの聞くものがすべて渠の気を沈ませ、何事につけても自分が厭わしく、自分に信用がおけぬようになってしまつた。何日も何日も洞穴に籠つて、食を摂らず、ギョロリと眼ばかり光らせて、渠は物思いに沈んだ。不意に立上がつてその辺を歩き廻り、何かブツブツ独り言をいひまた突然すわる。その動作の一つ一つを自分では意識しておらぬのである。どんな点がはつきりすれば、自分の不安が去るのか。それさえ渠には解らなんだ。ただ、今まで当然として受取つてきたすべてが、不可解な疑わしいものに見えてきた。今まで纏まつた一つ

のことと思われたものが、バラバラに分解された姿で受取られ、その一つの部分部分について考えているうちに、全体の意味が解らなくなっていくといったふうだった。

医者でもあり・占星師せんせいしでもあり・祈祷者きとうしやでもある・一人の老いたる魚怪が、あるとき悟浄を見てこう言うた。「やれ、いたわしや。因果いんがな病にかかったものじゃ。この病にかかったが最後、百人のうち九十九人までは惨めみじな一生を送らねばなりませんぞ。元来、我々の中にはなかつた病氣じゃが、我々が人間を咋くうようになってから、我々の間にもごくまれに、これに侵される者が出てきたのじゃ。この病に侵された者はな、すべての物事を素直に受取ることができぬ。何を見ても、何に出会っても『なぜ?』と

すぐに考える。究極の・正しやう真しん正しやう銘めいの・神様だけがご存じの

『なぜ?』を考えようとするのじゃ。そんなことを思うては生き

物は生きていけぬものじゃ。そんなことは考えぬというのが、こ

の世の生き物の間の約束ではないか。ことに始末に困るのは、こ

の病人が『自分』というものに疑いをもつことじゃ。なぜ俺おれは俺

を俺と思うのか? 他ほかの者を俺と思うてもさしつかえなかうに。

俺とはいつたいたいなんだ? こう考えはじめるのが、この病のいち

ばん悪い徴ちやうこう候こうじゃ。どうじゃ。当たりましたろうかの。お気

の毒じゃが、この病には、薬もなければ、医者もない。自分で治なほ

すよりほかはないのじゃ。よほどの機縁に恵まれぬかぎり、まず、

あんたの顔色のはれる時がありますまいて。」

文字の発明は疾とくに人間世界から伝わって、彼らの世界にも知られておつたが、総じて彼らの間には文字を輕けい蔑べつする習慣があつた。生きておる智慧ちえが、そんな文字などという死物で書留められるわけがない。(絵になら、まだしも画かけようが。)それは、煙をその形のままに手で執とらえようとするにも似た愚かさである、と、一般に信じられておつた。したがつて、文字を解することは、かえつて生命力衰退の徴しるし候として斥しりぞけられた。悟淨が日ごろ憂ゆう鬱つなものも、畢ひつき竟よう、渠かれが文字を解するために違ちがひないと、妖ばけ

怪物ものどもの間では思われておつた。

文字は尚とうとばれなかつたが、しかし、思想が軽んじられておつたわけではない。一万三千の怪物の中には哲学者も少くはなかつた。ただ、彼らの語彙ごいははなはだ貧弱だったので、最もむずかしい大問題が、最も無邪気な言葉でもつて考えられておつた。彼らは流沙河りゆうさがの河底にそれぞれ考える店を張り、ために、この河底には一脈の哲学的憂鬱が漂うていたほどである。ある賢明な老魚は、美しい庭を買い、明るい窓の下で、永遠の悔いなき幸福について冥想めいそうしておつた。ある高貴な魚族は、美しい縞しまのある鮮緑の藻もの蔭かげで、豎たてごと琴をかき鳴らしながら、宇宙の音楽的調和を讃たえておつた。醜く・鈍く・ばか正直な・それでいて、自分の愚か

な苦悩を隠そうともしない悟浄ごじょうは、こうした知的な妖怪ばけものども
の間で、いい嬲りなぶものになった。一人の聡明そうめいそうな怪物が、悟
浄に向かい、真面目まじめくさつて言うた。「真理とはなんぞや？」そ
して渠かれの返辞をも待たず、嘲笑ちやうしやうを口辺に浮かべて大膽おおまたに歩
み去った。また、一人の妖怪——これは※魚うぐの精だったが——は、
悟浄の病を聞いて、わざわざ訪ねて来た。悟浄の病因が「死への
恐怖」にあると察して、これを晒わらおうがためにやって来たのであ
る。「生ある間は死なし。死到いたれば、すでに我なし。また、何を
か懼おそれん。」というのがこの男の論法であった。悟浄はこの議論
の正しさを素直に認めた。というのは、渠かれ自身おそけつして死を怖れ
ていたのではなかったし、渠の病因もそこにはなかったのだから。

晒わらおうとしてやって来た※魚の精は失望して帰って行つた。

妖怪ばけものの世界にあつては、身体からだと心とが、人間の世界における

ほどはつきりと分かれてはいなかつたので、心の病はただちに烈はげしい肉体の苦しみとなつて悟浄を責めた。堪えがたくなつた渠かれは、ついに意を決した。「このうえは、いかに骨が折れようと、また、いかに行く先々で愚弄ぐろうされ晒わらわれようと、とにかく一応、この河の底に栖すむあらゆる賢人けんじん、あらゆる医者、あらゆる占星師せんせいしに親しく会つて、自分に納得なつとくのいくまで、教えを乞こおう」と。

渠かれは粗末じきとつな直綴まを纏まとうて、出発した。

なぜ、妖怪ばけものは妖怪であつて、人間でないか？ 彼らは、自己の属性の一つだけを、極度に、他との均つりあ衡を絶して、醜いまでに、非人間的なまでに、発達させた不具者だからである。あるものは極度に貪どんしよく食で、したがつて口と腹がむやみに大きく、あるものは極度に淫いんとう蕩で、したがつてそれに使用される器官が著しく発達し、あるものは極度に純潔で、したがつて頭部を除くすべての部分がすっかり退化しきつていた。彼らはいずれも自己の性向、世界観に絶対こしゆうに固執して、他との討論の結果、より高い結論たどに達するなどということを知らなかつた。他人の考えの筋道たどを辿るにはあまりに自己の特徴が著しく伸長しすぎていたからである。それゆえ、流沙河りゆうさがの水底では、何百かの世界観けや形

而上学が、けつして他と融和することなく、あるものは穩やかな絶望の歡喜をもつて、あるものは底抜けの明るさをもつて、あるものは願望はあれど希望なき溜息をもつて、揺動く無数の藻草のようにゆらゆらとたゆとうておつた。

三

最初に悟浄が訪ねたのは、黒卵道人として、そのころ最も高名な幻術の大家であつた。あまり深くない水底に累累々と岩石を積重ねて洞窟を作り、入口には斜月三星洞の額が掛かつておつた。庵主は、魚面人身、よく幻術を行のうて、

存亡自在、冬、雷を起こし、夏、氷を造り、飛者を走らしめ、走者を飛ばしめるといふ噂である。悟浄はこの道人に三月仕えた。幻術などどうでもいいのだが、幻術を能くするくらいなら真人であろうし、真人なら宇宙の大道を会得して、渠の病を癒すべき智慧をも知つていようと思われたからだ。しかし、悟浄は失望せぬわけにいかなかった。洞の奥で巨鼈の背に座つた黒卵道人も、それを取囲む数十の弟子たちも、口にするごとくいへば、すべて神変不可思議の法術のことばかり。また、その術を用いて敵を欺こうの、どこそこの宝を手に入れようのという実用的な話ばかり。悟浄の求めるような無用の思索の相手をしてくれるものは誰一人としておらなんだ。結局、ばかにされ晒いものにな

つた揚句あげく、悟浄は三星洞を追出された。

次に悟浄が行ったのは、沙虹隱士しゃこういんしのところだった。これは、年を経た蝦えびの精で、すでに腰が弓のように曲がり、半ば河底の砂に埋もれて生きておった。悟浄はまた、三月みの間、この老隱士に侍して、身の廻りまわの世話を焼きながら、その深奥しんおうな哲学に触れることができた。老いたる蝦の精は曲がつた腰を悟浄にさすらせ、深刻な顔つきで次のように言うた。

「世はなべて空むなしい。この世に何か一つでも善よきことがあるか。もしありとせば、それは、この世の終わりがいずれは来るであろうことだけじゃ。別にむずかしい理窟りくつを考えるまでもない。我々

の身の廻りを見るがよい。絶えざる変転、不安、懊惱おうのう、恐怖、
 幻滅、鬪争、倦怠けんたい。まさに昏昏こんこん、昧まい々々こんこんまいまい、紛々ふんぶん、若々じゃくじゃく
 として帰きするところを知らぬ。我々は現在という瞬間の上にな
 け立って生きている。しかもその脚下の現在は、ただちに消えて
 過去となる。次の瞬間もまた次の瞬間もそのとおり。ちようど崩
 れやすい砂の斜面に立つ旅人の足もとが一足ごとに崩れ去るよう
 だ。我々はどこに安んじたらよいのだ。停とまろうとすれば倒れぬ
 わけにいかぬゆえ、やむを得ず走り下り続けているのが我々の生
 じや。幸福だと？ そんなものは空想の概念だけで、けっして、
 ある現実的な状態をいうものではない。果敢はかない希望が、名前を
 得ただけのものじや。」

悟浄の不安げな面持ちを見て、これを慰めるように隠士いんしは付加えた。

「だが、若い者よ。そう懼おそれることはない。浪なみにさらわれる者は溺おぼれるが、浪に乗る者はこれを越えることができる。この有う為いてん轉變へんをのり超えて不壞不動ふえくどうの境地に到ることもできぬではない。古いにしえの真人しんじんは、能よく是非を超え善悪を超え、我を忘れ物を忘れ、不ふ死し不生ふしょうの域に達しておったのじゃ。が、昔から言われておるように、そういう境地が楽しいものだと思うたら、大間違ちがい。苦しみもない代わりには、普通の生きものの有もつ樂たのしみもない。無味、無色。誠まことに味氣あじけないこと蠟ろうのごとく砂のごとしじゃ。」

悟浄は控えめに口を挾はさんだ。自分の聞きたいと望むのは、個人

の幸福とか、不動^{ふどうしん}心の確立とかいうことではなくて、自己、および世界の究極の意味についてである、と。隠士は目脂^{めやに}の溜^{たま}った眼をしょぼつかせながら答えた。

「自己だと？　世界だと？　自己を外^{ほか}にして客観世界など、在^{まほろし}と思うのか。世界とはな、自己が時間と空間との間に投射した幻^{まほろし}じゃ。自己が死ねば世界は消滅しますわい。自己が死んでも世界が残るなどとは、俗も俗、はなはだしい謬^{びゆうけん}見^{けん}じゃ。世界が消えても、正体の判^{わか}らぬ・この不思議な自己というやつこそ、依然として続くじやろうよ。」

悟浄が仕えてからちようど九十日めの朝、数日間続いた猛烈な腹痛と下痢^{げり}ののちに、この老隠^{いんじや}者は、ついに斃^{たお}れた。かかる醜

い下痢と苦しい腹痛とを自分に与えるような客観世界を、自分の死によつて抹殺まつざつできることを喜びながら……。

悟浄ねんごは懇ろねんごにあとをとぶらい、涙とともに、また、新しい旅に上つた。

噂うわさによれば、坐忘ざぼう先生は常に坐禅ざぜんを組んだまま眠り続け、五十日に一度目を覚さまされるだけだという。そして、睡眠中の夢の世界を現実と信じ、たまに目覚めているときは、それを夢と思つておられるそうなの。悟浄がこの先生をはるばる尋ね来たとき、やはり先生は睡ねむつておられた。なにしろ流沙河りゅうさかで最も深い谷底で、上からの光もほとんど射さして来ない有様ゆえ、悟浄も眼の慣れる

までは見定めにくかったが、やがて、薄暗い底の台の上に結跏趺けっか
 坐ふせしたまま睡っている僧そうぎよう形がぼんやり目前に浮かび上がって
 きた。外からの音も聞こえず、魚類もまれにしか来ない所で、悟
 浄もしかたなしに、坐忘先生の前に坐すわって眼を瞑つぶって見たら、何
 かジーンと耳が遠くなりそうな感じだった。

悟浄が来てから四日めに先生は眼を開いた。すぐ目の前で悟浄
 があわてて立上がり、礼らいはい拜はいをするのを、見るでもなく見ぬでも
 なく、ただ二、三度瞬まばたきをした。しばらく無言の対坐たいざを続けたの
 ち悟浄は恐る恐る口をきいた。「先生。さつそくでぶしつけでご
 ざいますか、一つお伺いいたします。いったい『我』とはなんで
 ございましょうか？」
 「咄とつ！ 秦時しんじの※轆たくらくさん鑽さん！」という烈し

い声とともに、悟浄の頭はたちまち一棒を喰^{くら}った。渠^{かれ}はよろめいたが、また座に直り、しばらくして、今度は十分に警戒しながら、先刻の問いを繰返した。今度は棒が下^おりて来なかつた。厚い唇^{くちびる}を開き、顔も身体もどこも絶対に動かさずに、坐忘先生が、夢の中でのような言葉で答えた。「長く食を得ぬときに空腹を覚えるものが儼^{おまえ}じや。冬になつて寒さを感じるものが儼^{おまえ}じや。」さて、それで厚い唇^{くちびる}を閉じ、しばらく悟浄^{ごじよう}のほうを見ていたが、やがて眼を閉じた。そうして、五十日間それを開かなかつた。悟浄は辛^しんぼうづよ抱強^{んぼうづよ}く待った。五十日めにふたたび眼を覚ました坐忘先生は前に坐^{すわ}っている悟浄を見て言った。「まだいたのか？」悟浄は謹^{つづ}しんで五十日待った旨を答えた。「五十日？」と先生は、例の夢を

見るようなトロリとした眼を悟浄に注いだが、じつとそのままひと時ほど黙っていた。やがて重い唇が開かれた。

「時の長さを計る尺度が、それを感じる者の実際の感じ以外にないことを知らぬ者は愚かじや。人間の世界には、時の長さを計る器械ができたそうじやが、のちのち大きな誤解の種を蒔くことじやろう。大椿たいちんの寿も、朝菌ちようきんの夭ようも、長さに変わりはないのじや。時とはな、我々の頭の中の一つの装置しかけじやわい」

そう言終わると、先生はまた眼を閉じた。五十日後でなければ、それがふたたび開かれることがないであろうことを知っていた悟浄は、睡れる先生に向かつて恭々うやうやしく頭を下げてから、立去った。

「恐れよ。おののけ。しかして、神を信ぜよ。」

と、流沙りゅうさが河の最も繁華な四つ辻つじに立って、一人の若者が叫んでいた。

「我々の短い生しょうがい涯がいが、その前とあととに続く無限の大永劫だいえいごうの中に没入していることを思え。我々の住む狭い空間が、我々の知らぬ・また我々を知らぬ・無限の大広袤だいこうぼうの中に投込まれていることを思え。誰か、みずからの姿の微小つなさに、おののかずにいられるか。我々はみんな鉄鎖つなに繋がれた死刑囚だ。毎瞬間ごとにその中の幾人かずつが我々の面前で殺されていく。我々はなんの希望もなく、順番を待っているだけだ。時は迫っているぞ。その

短い間を、自己欺瞞ぎまんと酩酊めいていとに過ごそうとするのか？ 呪のろわれた卑怯ひきようもの者ものめ！ その間を汝なんじの惨みじめな理性を恃たのんで自惚うぬぼれ返かえつて
いるつもりか？ 傲慢ごうまんな身の程ほど知らずめ！ 嘖嘖くしやみ一つ、汝の

貧しい理性と意志とをもつてしては、左右できぬではないか。」

白哲はくせきの青年は頬ほおを紅潮させ、声を嗶からして叱咤しつたした。その女

性的な高貴な風姿のどこに、あのような激しさが潜ひそんでいるのか。悟浄は驚きながら、その燃えるような美しい瞳ひとみに見入みった。渠かれは青年の言葉から火のような聖きよい矢が自分の魂たまに向かつて放たれるのを感じた。

「我々の為なしうるのは、ただ神を愛おのれし己おのれを憎むことだけだ。部分ぶぶんは、みずからを、独立した本体だと自惚うぬぼれてはならぬ。あくまで、

全体の意志をもって己の意志とし、全体のためにのみ、自己を生
 きよ。神に合するものは一つの霊となるのだ」

確かにこれは聖きよく優すぐれた魂の声だ、と悟浄は思い、しかし、そ
 れにもかかわらず、自分の今饑うえているものが、このような神の
 声でないことをも、また、感ぜずにはいられなかった。訓言おしえは薬
 のようなもので、瘡おこりを病む者の前に腫はれものの薬をすすめられて
 もしかたがない、と、そのようなことも思った。

その四つ辻つじから程遠からぬ路傍ろぼうで、悟浄は醜こじい乞食じきを見た。恐
 ろしい佝僂せむしで、高く盛上がった背骨に吊つられて五臟ごぞうはすべて上に
 昇ありてしまひ、頭の頂は肩よりずっと低く落込んで、頤おとがは臍へそを隠

すばかり。おまけに肩から背中にかけて一面に赤く爛れた腫物ただはれものが崩れている有様に、悟浄は思わず足を停とめて溜息ためいきを洩もらした。すると、蹲うずくまっているその乞食こじきは、頸くびが自由にならぬままに、赤く濁めだまった眼玉をじろりと上向け、一本しかない長い前歯を見せてニヤリとした。それから、上に吊上つりあがった腕をブラブラさせ、悟浄の足もとまでよろめいて来ると、渠かれを見上げて言った。

「僭越せんえつじやな、わしを憐れあわみなさるとは。若いカタよ。わしを可哀かわいそう想なやつと思うのかな。どうやら、お前さんのほうがよほど可哀想に思えてならぬが。このような形にしたからとて、造物主をわしが怨んどるとでも思っていなさるのじやろう。どうしてどうして。逆に造物主を讃ほめとるくらいですわい、このような珍

しい形にしてくれたと思うてな。これからも、どんなおもしろい
 恰好かつこうになるやら、思えば楽しみのようでもある。わしの左臂ひじが
 鶏けいになつたら、時を告げさせようし、右臂みぎが弾はじき弓ゆみになつたら、
 それでふくろうでもとつて炙あぶり肉にくをこしらえようし、わしの尻しりが車輪くるまわに
 なり、魂たまが馬うまにでもなれば、こりやこのうえなしの乗物ちようで、重おも
 宝ほうじやろう。どうじや。驚おどいたかな。わしの名なはな、子輿しよとい
 うてな、子祀しし、子犁しれい、子来しらいという三人さんにんの莫ばくぎやく逆さかの友ともがあります
 じや。みんな女じよう※氏の弟子でしでの、ものの形かたちを超こえて不生ふしよう不死ふしきようの境きよう
 に入いつたれば、水みづにも濡ぬれず火かにも焼やけず、寝ねて夢見ゆめみず、覚さめて
 憂うれいなきものじや。この間まも、四人にんで笑わらうて話わしたことがある。
 わしらは、無なをもつて首かしらとし、生なまをもつて背せとし、死しをもつて尻しり

としとるわけじゃとな。アハハハ……。」

気味の悪い笑い声にギョツとしながらも、悟浄は、この乞食こそあるいは真人しんじん人というものかもしれないと思うた。この言葉が本物の物だと思えばたいしたものだ。しかし、この男の言葉や態度の中にどこか誇示的なものが感じられ、それが苦痛を忍んでむりに壮語さうごしているのではないかと疑わせたし、それに、この男の醜さうみにくさと膿うみの臭くささが悟浄に生理的な反撥はんぱつを与えた。渠かれはだいぶ心を惹ひかれながらも、ここで乞食こじきに仕えることだけは思い止まった。ただ先刻の話の中にあつた女※氏とやらについて教えを乞こいたく思うたので、そのことを洩もらした。

「ああ、師父しふか。師父はな、これより北の方かた、二千八百里、この

流沙河が赤水・墨水と落合うあたりに、庵を結んでおられる。お前さんの道心さえ堅固なら、ずいぶんと、教訓も垂れてくだされよう。せつかく修業なさるがよい。わしからもよろしくと申上げてくだされい。」と、みじめな佝僂は、尖った肩を精一杯いからせて横柄に言うた。

四

流沙河と墨水と赤水との落合う所を目指して、悟浄は北へ旅をした。夜は葦間に仮寝の夢を結び、朝になれば、また、果知らぬ水底の砂原を北へ向かって歩み続けた。楽しげに銀鱗を翻え

す魚族どもを見ては、何故に我一人かくは心怡しまぬぞと思
 い侘びつつ、渠は毎日歩いた。途中でも、目ぼしい道人修験
 者の類は、剩さずその門を叩くことにしていた。

貪食と強力とをもつて聞こえる虬髯鮎子を訪ねたとき、
 色あくまで黒く、逞しげな、この鯰の妖怪は、長髯をしご
 きながら「遠き慮のみすれば、必ず近き憂いあり。達人は大観
 せぬものじゃ。」と教えた。「たとえばこの魚じゃ。」と、鮎子
 は眼前を泳ぎ過ぎる一尾の鯉を掴み取ったかと思うと、それをム
 シヤムシヤかじりながら、説くのである。「この魚だが、この魚
 が、なぜ、わしの眼の前を通り、しかして、わしの餌とならねば

ならぬ因縁いんねんをもっているか、をつくづくと考えてみることは、

いかにも仙哲せんてつにふさわしき振舞いじやが、鯉を捕える前に、そ

んなことをくどくどと考えておつた日には、獲物は逃げて行くば

つかりじや。まずすばやく鯉を捕え、これにむしやぶりついてか

ら、それを考えても遅うはない。鯉は何故なにゆえに鯉なりや、鯉と鮒ふな

との相異についての形而上学的考察、等々の、ばかばかしく高こ

尚うしような問題にひっかかつて、いつも鯉を捕えそこなう男じやろ

う、お前はまえ。おまえの物憂ものうげな眼めの光が、それをはつきり告げと

るぞ。どうじや。「確かにそれに違いないと、悟浄は頭を垂れた。

妖怪はそのときすでに鯉を平げてしまい、なお貪婪どんらんそうな眼つ

きを悟浄のうなだれた頸筋くびすじに注そそいでおつたが、急に、その眼が

光り、咽喉のどがゴクリと鳴った。ふと首を上げた悟浄は、咄嗟とつさに、危険なものを感じて身を引いた。妖怪の刃のような鋭い爪つめが、恐ろしい速さで悟浄の咽喉をかすめた。最初の一撃にしくじった妖怪の怒りに燃えた貪どんしよく食しょく的な顔が大きく迫ってきた。悟浄は強く水を蹴けつて、泥煙を立てるとともに、愴惶そうこうと洞穴を逃れ出た。苛刻かこくな現実精神をかの寧どうもう猛もうな妖怪から、身をもつて学んだわけだ、と、悟浄は顫ふるえながら考えた。

隣人愛の教説者として有名な無腸むちよう公子こうしの講筵こうえんに列したときは、説教半ばにしてこの聖僧が突然饑うえに駆られて、自分の実の子（もつとも彼は蟹かにの妖精ようせいゆえ、一度に無数の子供を卵からか

えすのだが）を二、三人、むしやむしや喰^たべてしまつたのを見て、
 仰^ぎ天^ぎした。

慈悲^{じひにんにく}忍辱^{にんじやく}を説く聖者が、今、衆人環視の中で自分の子を捕えて食つた。そして、食い終わつてから、その事実をも忘れたるがごとくに、ふたたび慈悲の説を述べはじめた。忘れたのではなくて、先刻の飢えを充^みたすための行為は、てんで彼の意識に上つていなかつたに相違ない。ここにこそ俺^{おれ}の学^{まな}ぶべきところがあるのかもしれないぞ、と、悟^ご浄^{じやう}はへんな理窟^{りくつ}をつけて考えた。俺の生活のどこに、ああした本能的な没我的な瞬間があるか。渠^{かれ}は、貴^{とう}き^と訓^{くん}を得たと思^{おも}い、跪^{ひざまず}いて拝^{まが}んだ。いや、こんなふうにして、いちいち概念的な解釈をつけてみなければ氣の済まないところに、俺

の弱点があるのだ、と、渠は、もう一度思い直した。教訓を、か罐んづめにしないで生なまのままに身につけること、そうだ、そうだ、と悟浄は今一遍、はい拜をしてから、うやうやしく立去った。

蒲衣子の庵室あんしつは、変わった道場である。僅わずか四、五人しか弟子はいないが、彼らはいずれも師の歩みに倣なろうて、自然の秘鑰ひやくを探究する者どもであった。探求者というより、陶醉者と言ったほうがいいかもしれぬ。彼らの勤めるのは、ただ、自然をみ観て、しみじみとその美しい調和の中に透過することである。

「まず感じることです。感覚を、最も美しく賢く洗せん煉れんすることです。自然美の直接の感受から離れた思考などは、灰色の夢で

すよ。」と弟子の一人が言った。

「心を深く潜ませて自然をごらんなさい。雲、空、風、雪、うす

碧あおい氷お、紅藻べにもの揺れ、夜水中でこまかくきらめく珪藻類けいそうの光、

鸚鵡おうむがい貝いの螺旋らせん、紫むらさき水すい晶しゅうの結晶けっしょう、柘榴石ざくろいしの紅、螢石ほたるいし

の青。なんと美しくそれらが自然の秘密を語っているように見えることでしょうか。」彼の言うことは、まるで詩人の言葉のようだった。

「それなのに、自然の暗号文字を解くのも今一歩というところで、突然、幸福な予感よかんは消去しょうきょり、私どもは、またしても、美しいけれども冷たい自然の横顔を見なければならぬのです。」と、また、別の弟子が続けた。「これも、まだ私どもの感覚の鍛錬たんれんが足りな

いからであり、心が深く潜んでいないからなのです。私どもはまだまだ努めなければなりません。やがては、師のいわれるように『観ることが愛することであり、愛することが創造することである』ような瞬間をもつことができるでしょうから。」

その間も、師の蒲衣子ほいしは一言も口をきかず、鮮緑の孔雀石くじやくいしを一つ掌てのひらにのせて、深い歓びよろこを湛たたえた穏やかな眼差まなざしで、じつとそれを見つめていた。

悟浄は、この庵室ひとに一月ばかり滞在した。その間、渠かれも彼らとともに自然詩人となって宇宙の調和を讃たたえ、その最奥さいおうの生命に同化することを願うた。自分にとって場違いであるとは感じながらも、彼らの静かな幸福ひに惹かれたためである。

弟子の中に、一人、異常に美しい少年がいた。肌は白魚のよう
 に透すきとおりに、黒瞳こくとうは夢見るように大きく見開かれ、額にかか
 る捲毛まきげは鳩はとの胸毛のように柔らかであった。心に少しの憂いがあ
 るときは、月の前を横ぎる薄雲ほどの微かすかな陰翳かげが美しい顔にか
 かり、歓よろこびのあるときは静かに澄んだ瞳ひとみの奥が夜の宝石のように
 輝いた。師も朋輩ほうばいもこの少年を愛した。素直で、純粹で、この
 少年の心は疑うことを知らないのである。ただあまりに美しく、
 あまりにかぼそく、まるで何か貴い気体でもできているようで、
 それがみんなに不安なものを感じさせていた。少年は、ひまさえ
 あれば、白い石の上に淡飴色うすあめいろの蜂蜜はちみつを垂らして、それでひる
 がおの花を画かいていた。

悟浄ごじょうがこの庵室あんしつを去る四、五日前のこと、少年は朝、庵いおりを出たつきりでもどつて来なかつた。彼といつしよに出ていった一人の弟子は不思議な報告をした。自分が油断をしているひまに、少年はひよいと水に溶けてしまったのだ、自分は確かにそれを見た、と。他の弟子たちはそんなばかなことがと笑つたが、師の蒲衣いし子はまじめにそれをうべなつた。そうかもしれぬ、あの児こならそんなことも起こるかもしれぬ、あまりに純粹だつたから、と。

悟浄は、自分を取つて喰くおうとした鯰なますの妖怪ばけものの逞たくましさと、水に溶け去つた少年の美しさを、並べて考えながら、蒲衣子のもとを辞した。

蒲衣子の次に、渠かれは斑衣はんい※婆いけつばの所へ行つた。すでに五百余歳を
 経しよている女怪かだつたが、肌はだのしなやかさは少しも処女と異なる
 ところがなく、婀娜あだたるその姿態は能よく鉄てつ石せきの心をも蕩とろかすと
 いわれていた。肉の楽しみを極きわめることをもつて唯一の生活信条
 としていたこの老女怪は、後庭に房を連ねること数十、容姿たんせ端
 正せいな若者を集めて、この中に盈みたし、その楽しみに耽ふけるにあ
 たつては、親昵しんじつをも屏しりぞけ、交遊をも絶ち、後庭に隠れて、昼を
 もつて夜に継つぎ、三月みに一度しか外に顔を出さないのである。悟
 浄の訪ねたのはちようどこの三月に一度のときに当たつたので、
 幸いに老女怪を見ることができた。道を求める者と聞いて、※婆けつば
 は悟浄に説き聞かせた。ものうい憊つかれの翳かげを、嬋娟せんけんたる容姿の

どこかに見せながら。

「この道ですよ。この道ですよ。聖賢の教えも仙哲せんてつの修業も、つまりはこうした無上むじょうほうえつ法悦ほつえつの瞬間を持續させることにその目的があるのですよ。考えてもごらんなさい。この世に生を享うけるということとは、実に、百千万億恒河沙ごうがしや劫無限こうむげんの時間の中でも誠まことあに遇あいがたく、ありがたきことです。しかも一方、死は呆あきれるほど速やかに私たちの上に襲いかかってくるものです。遇あいがたきの生をもつて、及びやすきの死を待っている私たちとして、いったい、この道のほかに何を考えることができるでしょう。ああ、あの痺しびれるような歡喜しんぎ！常に新しいあの陶醉たうせい！」と女怪は酔つたように豔妖淫靡えんよういんぴな眼を細くして叫んだ。

「貴方あなたはお気の毒ながらたいへん醜みにくいおかたゆえ、私のところに留とどまつていただけこうとは思いませんから、ほんとうのことを申しますが、実は、私の後房では毎年百人ずつの若い男が困憊つかれのために死んでいきます。しかしね、断わっておきますが、その人たちはみんな喜んで、自分の一生に満足して死んでいくのですよ。誰一人、私のところへ留まつたことを怨うらんで死んだ者はありません。今死ぬために、この楽しみがこれ以上続けられないことを悔やんだ者はありませんが。」

悟浄の醜みにくさを憐あわれむような眼めつきをしながら、最後に※婆けつばはこうつけ加えた。

「徳とはね、楽しむことのできる能力のことですよ。」

醜いがゆえに、毎年死んでいく百人の仲間に加わらないで済んだことを感謝しつつ、悟浄はなおも旅を続けた。

賢^{けんじん}人たちの説くところはあまりにもまちまちで、渠^{かれ}はまったく何を信じていいやら解らなかつた。

「我とはなんですか？」という渠の問いに対して、一人の賢者はこういつた。「まず吼^ほえてみる。ブウと鳴くようならお前は豚じや。ギャアと鳴くようなら鵝^{がちょう}鳥じや」と。他の賢者はこう教えた。「自己とはなんぞやとむりに言い表わそうとさえしななければ、自己を知るのは比較的困難ではない」と。また、曰^{いわ}く「眼は一切を見るが、みずからを見ることができない。我とは所詮^{しよせん}、我の

知る能^{あた}わざるものだ」と。

別の賢者は説いた、「我はいつも我だ。我の現在の意識の生ずる以前の・無限の時を通じて我といつていたものがあつた。（それを誰も今は、記憶していないが）それがつまり今の我になつたのだ。現在の我の意識が亡^{ほろ}びたのちの無限の時を通じて、また、我というものがあるだろう。それを今、誰も予見することができず、またそのときになれば、現在の我の意識のことを全然忘れているに違いないが」と。

次のように言つた男もあつた。「一つの継続した我とはなんだ？ それは記憶の影の堆^{たい}積^{せき}だよ」と。この男はまた悟浄にこう教えてくれた。「記憶の喪失ということが、俺^{おれ}たちの毎日してい

ることの全部だ。忘れてしまっていることを忘れてしまっているゆえ、いろんなことが新しく感じられるんだが、実は、あれは、俺たちが何もかも徹底的に忘れちゃうからのことなんだ。昨日のことどころか、一瞬間前のことをも、つまりそのときの知覚、そのときの感情をも何もかも次の瞬間には忘れちまつてるんだ。それらの、ほんの僅か^{わず}一部の、臃げ^{おぼろ}な複製があとに残るにすぎないんだ。だから、悟浄よ、現在の瞬間てやつは、なんと、たいしたものじゃないか」と。

さて、五年に近い遍^{へん}歴^{れき}の間、同じ容態に違った処方をする多くの医者たちの間を往復するような愚かさを繰返したのち、悟^{ごじよ}

浄^うは結局自分が少しも賢くなっていないことを見いだした。賢
 くなるどころか、なにかしら自分がフワフワした（自分でないよ
 うな）訳の分からないものに成り果てたような気がした。昔の自
 分は愚かではあっても、少なくとも今よりは、しつかりとした―
 ―それはほとんど肉体的な感じで、とにかく自分の重量を有^もつて
 いたように思う。それが今は、まるで重量のない・吹けば飛ぶよ
 うなものになってしまった。外^{そと}からいろんな模様を塗り付けられ
 はしたが、中味のまるでないものに。こいつは、いけないぞ、と
 悟浄は思った。思索による意味の探索以外に、もつと直接的な解^こ
 答^{たえ}があるのではないか、という予感もした。こうした事柄に、計
 算の答えのような解答を求めようとした己^{おのれ}の愚かさ。そういうこ

とに気がつきだしたころ、行く手の水が赤黒く濁ってきて、渠かれは目指す女じょう※氏のもとに着いた。

女じょう※氏は一見きわめて平凡な仙せん人にんで、むしろ迂う愚ぐとさえ見え
た。悟浄が来ても別に渠かれを使うでもなく、教えるでもなかった。

堅けん 疆きょう は死の徒と、柔にゅう 弱じやく は生の徒となれば、「学ぼう。学ぼう」

というコチコチの態度を忌まれたものようである。ただ、ほん
のときたま、別に誰に向かつて言うのでもなく、何か呟つぶやいておら
れることがある。そういうとき、悟浄は急いで聞き耳を立てるの
だが、声が低くてたいは聞きとれない。三月みの間、渠かれはつい
になんの教えも聞くことができなかつた。「賢けん者じゃが他人につい

て知るよりも、愚者ぐしやが己おのれについて知るほうが多いものゆえ、自分の病は自分で治さねばならぬ」というのが、女※氏から聞きえた唯一の言葉だった。三月みめの終わりに、悟浄はもはやあきらめて、暇いとまご乞こいに師のもとへ行つた。するとそのとき、珍しくも女※氏は縷々るるとして悟浄に教えを垂れた。「目が三つないからとて悲しむことの愚かさについて」「爪つめや髪の毛の伸長をも意志によつて左右しようとしなければ気が済まない者の不幸について」「酔うている者は車から墜おちても傷つかないことについて」「しかし、一概に考えることが悪いとは言えないのであつて、考えない者の幸福は、船酔いを知らぬ豚のようなものだが、ただ考えることについて考えることだけは禁物であるということについて」

女※氏は、自分のかつて識しつていた、ある神智を有する魔物のことを話した。その魔物は、上は星せい辰しんの運行から、下は微生物類の生死に至るまで、何一つ知らぬことなく、深しん甚じん微み妙みょうな計算によつて、既往のあらゆる出来事を溯さかのぼつて知りうるとともに、将来起こるべきいかなる出来事をも推知しうるのであつた。ところが、この魔物はたいへん不幸だつた。というのは、この魔物があるときふと、「自分のすべて予見しうる全世界の出来事が、何なににゆえ故に（経過的でないかにしてではなく、根本的な何故に）そのごとく起こらねばならぬか」ということに想到し、その究極の理由が、彼の深甚微妙なる大計算をもつてしてもついに探さがし出せないことを見いだしたからである。何故ひまわり向日葵は黄色いか。何故草は

緑か。何故すべてがかく在あるか。この疑問が、この神通力じんずうりき広大

な魔物を苦しめ悩ませ、ついに惨みじめな死にまで導いたのであつた。

女じょう※氏はまた、別の妖精ようせいのことを話した。これはたいへん小

さなみすぼらしい魔物だったが、常に、自分はある小さな鋭く光

つたものを探しに生まれてきたのだと言っていた。その光るもの

とはどんなものか、誰にも解らなかつたが、とにかく、小妖しょうようせ

精いは熱心にそれを求め、そのために生き、そのために死んでい

つたのだつた。そしてとうとう、その小さな鋭く光つたものは見

つからなかつたけれど、その小妖精の一生はきわめて幸福なもの

だつたと思われると女※氏は語つた。かく語りながら、しかし、

これらの話のもつ意味については、なんの説明もなかつた。ただ、

最後に、師は次のようなことを言った。

「聖なる狂気を知る者は幸いじや。彼はみずからを殺すことによつて、みずからを救うからじや。聖なる狂気を知らぬ者は禍わざわいじや。彼は、みずからを殺しも生かしもせぬことによつて、徐々に亡びるからじや。愛するとは、より高貴な理解のしかた。行なうとは、より明確な思索のしかたであると知れ。何事も意識の毒どくじ汁ゆうの中に浸さずにはいられぬ憐あわれな悟浄よ。我々の運命を決定する大きな変化は、みんな我々の意識を伴わずに行なわれるのだぞ。考えてもみよ。お前が生まれたとき、お前はそれを意識しておつたか？」

悟浄ごじょうは謹しんで師に答えた。師の教えは、今ことに身にしみ

てよく理解される。実は、自分も永年の遍歴の間に、思索だけではますます泥沼どろぬまに陥るばかりであることを感じてきたのであるが、今の自分を突破つて生まれ変わることができずに苦しんでいるのである、と。それを聞いて女じよう※氏は言った。

「溪流が流れて来て断崖だんがいの近くまで来ると、一度渦巻うずまきをまき、さて、それから瀑布ばくふとなつて落下する。悟浄よ。お前は今その渦

巻の一步手前で、ためらつているのだな。一步渦巻にまき込まれ

てしまえば、那落ならくまでは一息。その途中に思索や反省や低徊ていかいの

ひまはない。臆おくびよう病な悟浄よ。お前は渦巻うずまきつつ落ちて行く者

どもを恐れと憐れあわれみとをもつて眺めながながら、自分も思い切つて飛

込もうか、どうしようかと躊躇ちゆうちよ躊躇ちよしているのだな。遅かれ早か

れ自分は谷底に落ちねばならぬとは十分に承知しているくせに。
うずまき渦巻にまき込まれないからとて、けっして幸福ではないことも
 承知しているくせに。それでもまだお前は、傍観者の地位に恋
れんれ
 々として離れられないのか。物ものすぢ凄こい生の渦巻の中で喘あえいでい
 る連中が、案外、はたで見るほど不幸ではない（少なくとも懷疑
 的な傍観者より何倍もしあわせだ）ということ、愚かな悟浄よ、
 お前は知らないのか。」

師の教えのありがたきは骨こつずい髓いに徹して感じられたが、それで
 もなおどこか釈然としないものを残したまま、悟浄は、師のもと
 を辞した。

もはや誰にも道を聞くまいぞと、かれ渠は思った。「誰も彼も、え

らそうに見えたって、実は何一つ解わかつてやしないんだな」と悟浄は独ひとりごと言ことを言いながら帰途についた。「『お互いに解わかつてゐるふりをしようぜ。解わかつてやしないんだってことは、お互いに解わかり切きつてるんだから』という約束のもとにみんな生きているらしいぞ。こういう約束がすでに在あるのだとすれば、それをいまさら、解わからない解わからないと言いつて騒さわぎ立たてる俺おれは、なんという氣きの利きかない困こりものだろう。ままつたく。」

五

のろまで愚ぐ図ずの悟ご浄じょうのことゆえ、
 翻ほん然ぜん大たい悟ごとか、
 大だい活かつげん

現前^{げんぜん}とかいった鮮^{あざ}やかな芸当^{げんどう}を見せることはできなかつたが、徐々に、目に見えぬ変化が渠^{かれ}の上に働いてきたようである。

はじめ、それは賭^かけをするような気持であつた。一つの選択が許される場合、一つの途^{みち}が永遠の泥^{でいねい}濘^いであり、他の途^{みち}が険^{けわ}しくはあつてもあるいは救われるかもしれぬのだとすれば、誰しもあとの途を選ぶにきまつている。それだのになぜ躊躇^{ちゆうちよ}していたのか。そこで渠^{かれ}ははじめて、自分の考え方の中にあつた卑^{いや}しい功利的なものに氣づいた。嶮^{けわ}しい途^{みち}を選んで苦しみ抜いた揚句^{あげく}に、さて結局救われないとなつたら取返しをつかない損だ、という氣持が知らず知らずの間に、自分の不決断に作用していたのだ。骨折^{こつせつ}り損を避けるために、骨はさして折れない代わりに決定的な損

亡へしか導かない途に留まろうというのが、不精ぶしようで愚かで卑しい俺おれの氣持だったのだ。女じょう※氏のもとに滞在している間に、しかし、渠かの氣持も、しだいに一つの方向へ追詰められてきた。初めは追つめられたものが、しまいにはみずから進んで動き出すものに変わろうとしてきた。自分は今まで自己の幸福を求めてきたのではなく、世界の意味を尋ねてきたと自分では思っていたが、それはとんでもない間違いで、実は、そういう変わった形式のもとに、最も執念深く自己の幸福を探していたのだということが、悟浄わかに解りかけてきた。自分は、そんな世界の意味を云々うんぬんするほどたいした生きものでないことを、渠かは、卑下ひげ感をもってでなく、安らかな満足感をもって感じるようになった。そして、そんな生

意気をいう前に、とにかく、自分でもまだ知らないでいるに違いない自己を試み展開してみようという勇気が出てきた。躊躇躊躇する前に試みよう。結果の成否は考えずに、ただ、試みるために全力を挙げて試みよう。決定的な失敗に帰したっていいのだ。今までいつも、失敗への危惧から努力を抛棄していた渠が、骨折り損を厭わないところにまで昇華されてきたのである。

六

悟浄ごじょうの肉体はもはや疲れ切っていた。

ある日、渠かれは、とある道ばたにぶつ倒れ、そのまま深い睡ねむりに

落ちてしまった。まったく、何もかも忘れ果てた昏睡こんすいであつた。渠は昏昏こんこん々々として幾日か睡り続けた。空腹も忘れ、夢も見なかつた。

ふと、眼めを覚ましたとき、何か四辺あたりが、青白く明るいことに気がついた。夜であつた。明るい月夜であつた。大きな円まるい春の満月が水の上から射し込んできて、浅い川底を穏やかな白い明るさで満たしているのである。悟浄は、熟睡のあとのさっぱりした気持ちで起上がった。とたんに空腹に気づいた。渠はそのへんを泳いでいた魚類を五、六尾手摺てづかみにしてむしやむしや頬張ほおばり、さて、腰こしに提さげた瓢ふくべの酒を喇叭らっぱ飲みにした。旨うまかつた。ゴクリゴクリと渠は音を立てて飲んだ。瓢ふくべの底まで飲み干してしまふと、いい気

持で歩き出した。

底の真砂まやいしの一つ一つがはつきり見分けられるほど明るかった。水草に沿うて、絶えず小さな水泡みなわの列が水銀球のように光り、揺れながら昇って行く。ときどき渠かれの姿を見て逃出す小魚どもの腹が白く光つては青水藻あおみどりの影に消える。悟浄はしだいに陶然としてきた。柄がらにもなく歌が唱うたいたくなり、すんでのことに、声を張上げるところだった。そのとき、ごく遠くの方で誰かの唱つているらしい声が耳にはいつてきた。渠は立停たちどまって耳をすました。その声は水の外から来るようでもあり、水底のどこか遠くから来るようでもある。低いけれども澄透すみとおった声でほそぼそと聞こえてくるその歌に耳を傾ければ、

こうこくのしゅんぷうふきたたず
 江国春風吹不起

しやこないてしんかのうちにあり

鷓鴣啼在深花裏

さんきゆうなみたこうしてうおりゆうにかす

三級浪高魚化竜

ちじんなおくおとうのみず
 痴人猶※夜塘水

どうやら、そんな文句のようでもある。悟浄ごじょうはその場に腰を下ろして、なおもじつと聴入った。青白い月光に染まった透明な水の世界の中で、単調な歌声は、風に消えていく狩りの角笛の音ねのように、ほそぼそといつまでもひびいていた。

寝たねのでもなく、さりとして覚めていたのでもない。悟浄は、魂

が甘く疼く^{うず}ような氣持で茫然^{ぼうぜん}と永い間そこに蹲^{うづくま}つていた。そのうちに、渠^{かれ}は奇妙な、夢とも幻ともつかない世界にはいつて行つた。水草も魚の影も卒^{そつぜん}然と渠の視界から消え去り、急に、得^えもいわれぬ蘭麝^{らんじや}の匂^{にお}いが漂うてきた。と思うと、見慣れぬ二人の人物がこちらへ進んで来るのを渠は見た。

前なるは手に錫^{しやく}杖^{じよう}をついた一癖^{ひとくせ}ありげな偉丈夫^{いじようふ}。後ろなるは、頭に宝珠^{ほうじゆ}瓔珞^{ようらく}を纏^{まと}い、頂^{たう}に肉髻^{にくけい}あり、妙相^{みよう}相端^{そうたん}嚴^{げん}、仄^{ほの}かに円光^{えんこう}を負うておられるは、何さま尋常人^{ただびと}ならずと見えた。さて前なるが近づいて言つた。

「我は托塔^{たくとう}天王の二太子、木叉^{もくしや}惠岸^{えがん}。これにいますはすなわち、わが師父^{しふ}、南海の觀世音菩薩^{かんぜおんぼさつ}摩訶薩^{まかさつ}じや。天^{てん}龍^{りゆう}・夜叉^{やしや}

・乾闥婆けんたつばより、阿脩羅あしゆら・迦楼羅かるら・緊那羅きんなら・摩羅伽まごらか・人・非人

に至るまで等しく憫あわれみを垂れさせたもうわが師父には、このたび、爾なんじ、悟浄が苦惱くるしみをみそなわして、特にここに降くだつて得度とくどしたもうのじや。ありがたく承るがよい。」

覚えこころべず頭を垂れた悟浄の耳に、美しい女性的な声——妙音みょうおんというか、梵音ぼんおんというか、海潮音かいちようおんというか、——が響ひびいてきた。

「悟浄ごじようよ、諦あきらかに、わが言葉を聴いて、よくこれを思念せよ。身の程ほど知らずの悟浄よ。いまだ得ざるを得たりといいいまだ証あかしせざるを証せりと言うのをさえ、世尊せそんはこれを増上慢ぞうじようまんとて難なんぜられた。さすれば、証すべからざることを証せんと求めた爾なんじのご

ときは、これを至極しごくの増上慢といわずしてなんとのおうぞ。爾の
 求むるところは、阿羅漢あらかんも辟支仏びやくしぶつもいまだ求むる能あたわず、また
 求めんともせざるところじゃ。哀れな悟浄よ。いかにして爾の魂
 はかくもあさましき迷路に入ったぞ。正観を得れば浄業じようごうたち
 どころに成るべきに、爾、心相羸劣しんそうるいれつにして邪観じゃかんに陥り、今
 この三途無量の苦悩さんずむりように遭あう。惟おもうに、爾は観想なんじかんそうによつて救わ
 るべくもないがゆえに、これよりのちは、一切の思念を棄すて、た
 だただ身を働かすことによつてみずからを救おうと心がけるがよ
 い。時とは人の作用はたらきの謂いじゃ。世界は、概観がいかんによるときは無意
 味のごとくなれども、その細部に直接働きかけるときはじめて無
 限の意味を有もつものじゃ。悟浄よ。まずふさわしき場所に身を置き、

ふさわしき働きに身を打込め。身の程知らぬ『何故』は、向後一こうご
 切打捨てることじゃ。これをよそにして、爾の救いはないぞ。さ
 て、今年の秋、この流沙河りゅうさがを東から西へと横切る三人の僧があ
 ろう。西方金蟬長老きんせんのうまれかわり転生うまれかわり、玄奘法師げんじょうほうしと、その二人の
 弟子どもじゃ。唐の太宗皇帝とうの綸命りんめいを受け、天竺三国大
 雷音寺いおんじに大乘三蔵だいじょうさんぞうの真經しんぎょうをとらんとて赴くものじゃ。おもむ
 悟浄よ、爾も玄奘なんじに従うて西方に赴け。おもむこれ爾にふさわしき位置ところ
 にして、また、爾にふさわしき勤めじゃ。途は苦しかろうが、よ
 く、疑わずして、ただ努めよ。玄奘の弟子の一人に悟空ごくうなるもの
 がある。無知無識にして、ただ、信じて疑わざるものじゃ。爾は
 特にこの者について学ぶところが多かろうぞ。

悟浄がふたたび頭をあげたとき、そこには何も見えなかった。渠は茫然と水底の月明の中に立ちつくした。妙な気持である。ぼんやりした頭の隅で、渠は次のようなことをとりとめもなく考えていた。

「……そういうことが起こりそうな者に、そういうことが起こり、そういうことが起こりそうなきに、そういうことが起こるんだな。半年前の俺だったら、今のようなおかしな夢なんか見るはずはなかったんだがな。……今の夢の中の菩薩の言葉だって、考えてみりや、女※氏や 蚪髯 鮎子の言葉と、ちつとも違つてやしないんだが、今夜はひどく身にこたえるのは、どうも変だぞ。そりや俺だつて、夢なんか救済になるとは思ひはしないさ。しか

し、なぜか知らないが、もしかすると、今の夢のお告げの唐僧とうそうとやらが、ほんとうにここを通るかもしれないというような気がしてしかたがない。そういうことが起こりそうなきには、そういうことが起こるものだというやつでな。……」

渠はそう思つて久しぶりに微笑した。

七

その年の秋、悟浄ごじようは、はたして、大唐だいたうの玄奘げんじよう法師ほうしに値ち遇ぐうし奉り、その力で、水から出て人間となりかわることができた。そうして、勇敢にして天真てんしん爛漫らんまんな聖天せいてん大聖だいたいせい孫悟空そんごくうや、

怠惰たいだな楽らく天家てんけ、天蓬てんぼう元帥げんすい猪悟能ちよごのうとともに、新しい遍へん歴れきの途みちに上あることとなつた。しかし、その途上みちのうへでも、まだすつかりは昔むかしの病やまひの脱ぬけ切きつていない悟淨ごじやうは、依然いぜんとして独ひとりり言ことばの癖くせを止やめなかつた。渠かれは呖つぶやいた。

「どうもへんだな。どうも腑ふに落ちない。分からないことを強しいて尋ねようとしなくなるゝことが、結局けつぐう、分わかつたといふことなのか？ どうも曖あい昧まいだな！ あまりみごとに脱皮だつぴではないな！ フン、フン、どうも、うまく納得なつとくがいかぬ。とにかく、以前いぜんほど、苦くるしみにならなくなつただけは、ありがたいが……。」

——「わが西遊記」の中——

青空文庫情報

底本：「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫 角川書店

1968（昭和43）年9月10日改版初版発行

1998（平成10）年5月30日改版52版発行

入力：佐野良二

校正：松永正敏

2001年3月16日公開

2011年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

悟浄出世

中島敦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>